とある妹の人生相談？

FAZZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある妹の人生相談？

【Ｎコード】
Ｎ０７３２Ｑ

【作者名】
ＦＡＺＺ

【あらすじ】
とある現象によって異世界に飛ばされた上条当麻とインデックス。
そこで出会った高坂京介と高坂桐乃の兄妹。
冷めきった関係にある兄妹の秘密を当麻は知ってしまった？
兄と妹が交差する時、物語は始まる！

とある日常（前書き）

どうもＦＡＺＺです。
下手な文章ですが、読んで頂けたらと思いますのでよろしくお願いします

とある日常

「不幸だ…」

とある寮で少年は呟いた。

「とうま、お腹がすたんだよ～」

「じゃあお金あげるから買ってきなさい」

そう言いながら千円札を修道服を着た少女に少年は手渡す

「私は作って欲しいんだよ！」

「あのなぁ…見ればわかるだろ！今上条さんは宿題に追われてるの！」

彼の名は上条当麻。右手に幻想殺し（イマジンブレイカー）と言う異能の力を持つ少年であり、現在は宿題に手をつけている。

「日頃やらないとうまがいけないんだよ！」

彼女の名はインデックス。
頭に１０万３０００冊の魔導書を持つ少女である。
その横暴さは度々当麻を苦しめていると言っても過言ではない。

「俺だって大覇星祭で競技に出なかっただけで出された宿題なんかやりたくねぇよ！」

「それはとうまが私に言わずに魔術師を探してるからいけないんだよ。自業自得だね」

「なんだとぉ！」

「なにさ！」

見事に飯も宿題もそっちのけにして始まる喧嘩。彼らの日常―しかし日常はあっさりと崩れた

カッ

「わぁっ」

「なんだなんだ？」

眩い光が彼らを包んだ。

「ん？ここは…」

「とうまの家じゃないよね？」

「それ以前にここは…

―学園都市じゃない？

とある出会い？（前書き）

本編のスタートです？

とある出会い？

「確かに家がたくさんなんだよ！？」

状況が把握し切れてないインデックスは住宅街への感想を漏らす

（つまり学園都市外に飛ばさた？さっきな光が原因か？とすると…魔術師？）

思考を巡らせ考える当麻
しかしその思考は途切れられる

「アンタ達、あたしの家に何か用？」

「「！？」」

後ろから聞こえた声に反応する2人
目の前には茶髪にピアスと言った今時の垢抜けた女子中学生が立っていた。

「俺達、道に迷ってたんですよ」

「ここが君の家ならちょっと入れて欲しいかも？」

2人ともとりあえず人の存在に喜んだのか無礼など気にしてないようである。

「は？なんでアンタ達を…いいわ、入れてあげる」

「じゃあ上がらせて貰うんだよ～」

当麻を見た時は鋭い目つきだったがインデックスを見た後何を思ったのか女子中学生は初対面の２人を家に入れた。

（初対面の人間をすんなり入れた？…まさか魔術師？）

「たっだいま」

「お邪魔するんだよ」

「お邪魔になります」

インデックスは笑顔で家に入ったが当麻は警戒心が解けないのか若干険しい表情で家に入る。

「あら桐乃…後ろの方々は？」

「教会の方か？」

リビングに入ると彼女の父と母であろう人が２人の存在に疑問を抱く。

「なんか道に迷ったとかなんとか」

「ええ実は…」

「と言うわけなんですよ」
「ふむ、つまり君達はローマ教と呼ばれる教の者であったが追い出され身寄りが無い所に桐乃と出会ったわけだな？」
「あっ、はい」
食卓の椅子を借りて当麻は現在の状況を話した。ただ敵かどうかを判別するためにもかなりの嘘をついてはいるが。
「インデックスちゃん大変だね…お母さん、しばらく家に泊められないかな？」
「確かに…可哀想だし、お金が貯まる間だけでも。ね？お父さん」
「あぁ、部屋の問題を解決すれば問題はない」
「本当？ありがとうだよ！」
家に泊めて貰えると決まったインデックスは喜びの声を上げる。
しかし当麻は煮え切らなく、とある疑問をぶつける
「あの…学園都市って知ってますか？」
「知らないわよ」
あっさりと当麻の一番の疑問は打ち消された。
（学園都市の存在を知らないのか。つまりここは俺達の住む世界とは異なる世界…って事か。魔術はともかく科学すら発展してないっ

ぽいしな…にしても）
様々な疑問を解決した後当麻はチラリと少女の一桐乃の方を見る
（コイツ…明らかに俺とインデックスを見る目に違いがあるよな？）
「じゃああたしがインデックスちゃんを部屋に連れてくね！」
「ああ」
桐乃は一瞥してインデックスと共に部屋を出る
それに当麻も着いて行き、廊下を出る。
「…ってか、アンタもなんで着いてくんの？」
「はい？」
リビングを出てすぐ桐乃は当麻を睨み付けながら話しかける
「いっとくけどあたし、アンタは部屋に入れる気ないから」
「じゃあ何処にいればいいんだよ？」
「二階の倉庫…とか？」
しばらく考え桐乃はそう言った
「とかじゃねーよ！なんだよその態度！」
「とうま、落ち着くんだよ～」

「インデックスちゃんの言う通り、アンタは仕方なく入れてあげるんだから感謝しなさいよ」

「んだと…」

明らか軽蔑した態度に腹を立てた当麻は桐乃の方へ近づく。

その瞬間

「ただいまー。ってあんたら誰？」

玄関からYシャツを着た少年が現れたのであった。

俺の妹がシスターさんと一緒に住むわけがない（前書き）

今回は高坂京介視点でお送りします

俺の妹がシスターさんと一緒に住むわけがない

「ただいまーってあんたら誰？」

帰宅した俺の前には桐乃に詰め寄る謎の私服少年、修道服を着たシスターさん（？）、そして俺の妹がいたわけだが…

明らかにおかしいだろ！
俺は確かに妹の友人については知らん。てか知ろうとも思わん。だからってシスターさんはおかしいだろ！
つーかあの少年は…似た者を感じるな。うん

「あ、本日から高坂家にお世話になる上条当麻です！」

「私はインデックスなんだよ！」

「はい？」

俺は上条って言う人から一部始終を聞いた。

「なるほど。で、何で桐乃と喧嘩してんの？」

「は？アンタには関係無いっしょ」

今まで口を開かなかった桐乃が口を開いた。

我ながらこう言われると分かったたがなんで聞いたんだろうね？

てかコイツ、明らか俺に似た感じを上条さんから感じてイラついてんだろ。
で、インデックスさんがいるから家に泊めた…と
最近、この妹の心境が若干読めるようになってきたな…

「はいはい、そうですね」
これ以上の論議は無駄と思い、俺はさっさと自分の部屋に向かう。
後ろから3人とも着いて来たけどな。

「じゃあインデックスちゃんは私の隣の部屋でいい？」

「うん！」
あっさり打ち解けてるなこの2人。
2人が部屋に入り廊下には俺と上条さんが残った
「あの…倉庫ってどこっすか？」本当に倉庫で寝る気なんだな…この人。

「いや、俺の部屋なら貸すぞ？」

桐乃に後から「アンタ達キモ」って言われるのがオチだろうが上条さんが可哀想だ

「いや、お構いなく。慣れてるんで」
どうやったら慣れるんだよ！
「ああ、そうか。向こうの部屋だぞ」
しかし呼び止めるわけにも行かなく、倉庫をを指差した
「どうもっす」
「おう」
上条さんも部屋に入ったので残った俺も部屋に入る事にした。

「さーて」
着替え終わった俺はノートパソコンの電源を入れる。
何をやるかって？それは…アレだよ。あんまり言いたく無いんだけどな
俺はそう言いながらノートパソコンのとあるアイコンを押す。すると出てきたのがこれだ
「真妹大戦シスカリプス」
ロリ声の妹の声でタイトルコールが響く。

そう、俺はエロゲーをやってるのだ。
…いや、やりたくってやってるわけじゃねーぞ？信じて貰えないだろうがこれは俺の妹が押し付けて来たゲームである
数ヶ月前、俺はたまたま知りたくもなかった妹の趣味をしってしまった。
成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗…と完璧超人である俺の妹には１つだけ欠点があった。
何を隠そう妹物のエロゲーや子供向けアニメが大好きなのである。
信じられない？俺だって最初はそうだったよ。
つまり、完璧超人な俺の妹はかなりのオタク…それも妹が大好きである。
だから妹体質っぽいインデックスさんを家に泊めたわけである。
先程言ったように妹の秘密を知った俺は人生相談と言う名目で様々な無理難題を押し付けられた。
エロゲーやったり、妹のためにオタク友達作ったり、あの強面親父と桐乃の趣味を守るために戦った事もある。
だからって俺達は仲が良いと言うわけではない。むしろ互いに嫌い合ってるのである。
そしてそれはこれからも続いて行くだろう。
だからといって一度引き受けた人生相談を辞めるわけにはいかない。
と言うわけで人生相談の一貫で今俺は妹物の格闘ゲームをやっているのである。

「あーまた負けた！」シスカリで負けてしまい、思わず俺は声を上げる。

そんな時であった。

「あのー、ちょっといいすか？」

なんと上条さんが部屋に入ったきたのであった…。

俺の妹がシスターさんと一緒に住むわけがない（後書き）

俺妹の時間軸は京介が大介と対決後です

とある兄妹の秘密！？（前書き）

あらすじ
しばらく高坂家でお世話になる事になとた当麻とインデックス。そしてエロゲー中の京介の部屋に当麻が入ってしまい？

とある兄妹の秘密！？

「あのー、ちょっといいすか？」

当麻はそう言って京介の部屋に入る。

はっきり言って桐乃とは仲良くなれそうにない。ならば京介とは仲良くしとこう。と思い挨拶しに行ったのである。

がそこで当麻は衝撃的な光景を目の当たりにする。

「おおっ！」

焦った素振りを見せながら京介は当麻にパソコンの画面が見えないように覆い被さる。

しかし、時は遅く当麻の目には確かに辱めを受ける妹キャラの姿が見えてしまった。

「高坂さん安心してください。黙っときますから」

「誤解だー！」

図らすともいつか当麻が叫んだ台詞を吐きながら京介は扉を閉めようとする当麻を呼び止める。

「これには理由があってな…それより何か用か？」

「用ってほどの用じゃないんすけど…」

とりあえず話題を変えようとする京介の意思を読み取ったのか当麻も話題を変えようとしていた。

「なんで妹とあんなに仲が悪いんすか？」

とりあえず当麻はある意味一番の疑問をぶつける

何故なら当麻の周りの兄妹や姉妹と言えば土御門、御坂（クローンだが）とどうにも仲の良いイメージが強いからである。

だからこそ京介と桐乃の冷え切った関係は疑問であったのである。

「なんでって言われてもなぁ…気づいたら今の関係になってたとしか…」

「あぁ、そうなんですか」

煮え切らなかったがとりあえず当麻の疑問は自己完結した。

「じゃあ俺からも…インデックスさんと上条さんってどう言う関係だ？」

「…」

はっきり言って当麻には一番答え辛い質問であった。
魔術も科学も知らない人間にはかなり説明しずらい事である。
とりあえず当麻は適当に誤魔化す事にした。

「互いにローマ教を追い出されてからの付き合いとしか…」

「そうか」

当麻と同じく京介も納得してはいないがとりあえずそこで話を終える事にした。

「じゃあ、俺はこれで」

それから当麻と京介は随分話し、当麻は部屋を出ようとした。

「おう、じゃあな上条さん」

「当麻でいいっす」

「じゃあ俺も京介でいいぜ？」

「おう」

そう言い、当麻は部屋を後にした。

「さて」

当麻が部屋を出た少し後、京介も自分の部屋を出ようと扉を開けようとしていた。

「あんまり話たくないが桐乃の趣味を知られたんだから…桐乃に言いにいくしかねぇよな…」

はっきり言ってあれは自分と趣味だ。と言えば京介の立場が危ぶまれるだけで住むかもしれない。
だがこれからしばらく同じ家で暮らすんだから知られた以上本当の事を言うべきだろう。

それに当麻はこの趣味をあまり軽蔑だろう。
と言う確信に近い何かがあったのである。

その夜中の事である。

「当麻、ちょっといいか？」

「なんだ？」

寝ようとしていた当麻の部屋の扉を京介が叩いていた。

「ちょっと出て来て欲しいんだが」

「わかった」

京介に言われるままに当麻は部屋を出てとある部屋の前に立つ

「ここは…」

2人の前には桐乃の部屋があったのである。

「桐乃、当麻連れて来たぞ」

「はいはい」

ガチャ

機嫌が悪そうな表情で桐乃が部屋の鍵を開ける

嫌いな兄とその兄に似た当麻をわざわざ部屋に入れるのだから仕方ない

ちなみに夕方に京介が桐乃の部屋を訪ねた時は恐ろしい具合に罵倒されたのだが、これはまた別の話。

「適当な所に腰かければ？」

部屋に入るなり自分は椅子に座りながら2人に床を指差しながら命令する桐乃

「「はいはい…」」

嫌そうな顔をしつつも京介も当麻も桐乃に従い床に腰をかける

「で、アンタのせいでコイツにバレちゃったのよね？」

「あぁ、まあな」

「ん？何の話だ？」

桐乃と京介の話に着いていけない当麻はとぼけた声をあげる

「は？まだ何も話してないの？しょうがないわね…」

そう言いながら桐乃は立ち上がり部屋のタンスをどけてふすまに手をかける

ガラッ

「こう言う事よ！」

桐乃の部屋のふすまが空いたその中に入ってたのは大量のゲーム、アニメＤＶＤ、フィギュア等のまさにオタクの部屋と言うべき物で溢れていた

「な、なんだこれ？」

完璧超人とでも言えるであろう桐乃の意外な趣味
これには１０万３０００冊の魔導書やらクローン等が関わる事件に立ち合ってきた当麻ですら素直に驚いていた。

「その箱は？」

「これは妹メーカーって言うゲームで…」

その後当麻は長々とエロゲーや子供向けアニメ、桐乃が妹物のエロゲーマーである事を語られた。

「で？感想は？」

京介に聞いた時と同じ様に桐乃は当麻に自分の趣味の感想を聞く。

「何って…そりゃ驚いたけどさ」

「人の趣味だし悪くないと思うぜ？」

当麻は驚ろきはしたもののかなり冷静に桐乃の趣味を受け止めてい

た。
それには毎日似た話をしてくる青髪ピアスや妹大好き土御門等の当麻の友人を見て慣れていたのも原因であろう。
「な？言っただろう。当麻なら受け止めてくれるってさ」
「アンタのミスで教えてあげてんのに何偉そうにしてんの？つーか下の名前呼びとかキモいんですけど」
「すいませんした！」
桐乃の趣味を受け止めた当麻に感謝しつつ話かけた京介はあっさり罵倒されてしまった。
「…まぁ、あのゲームの持ち主は桐乃だったってわかったし俺は寝るわ」
今日の一件に納得した当麻はそのまま部屋を出ようとした
しかし
「ちょっと待って！」
桐乃の呼び声でその行動は妨げられる
「あたしの秘密知ったんだし…アンタにも聞いてもらうから」
「何を？」

そのやり取りを聞いた途端に京介の口から深いため息がこぼれた

「あたしの人生相談聞いてもらうから！」

その一言を聞いて当麻は全てを察した

何故桐乃の趣味を京介が知っているのか
何故２人が共通のゲームをしているのか
それはこんな感じで京介も人生相談を引き受けざる得なかったため
であろう。

その全てを察した当麻は思わず口に出してこう言った

「不幸だ…」

当麻の不幸な日常が再び始まろうとしていた

とある兄妹の秘密！？（後書き）

やはりインデックスさんが空気になってしまうなぁ…

とある友達の眼鏡娘（前書き）

あらすじ
たまたま高坂兄妹の秘密を知ってしまった当麻
彼も京介同様、桐乃から「人生相談」を受ける事に…
あれから数日…桐乃から人生相談は来なかった

とある友達の眼鏡娘

「じゃあ行ってきます」

「金については心配しなくていいのだが…」

「心配には及ばないですよ」

当麻は大介に一瞥をしてから家を出た。

高坂家に居候させてもらっているのに何もしないのは迷惑ではないか―

と考えた当麻はとりあえず生活費稼ぎのためにバイトを始める事にした。今日はバイト探しが主である

ちなみにインデックスについては桐乃の好きなアニメである「ほしくずウィッチめるる」のＤＶＤを見せているため問題は無い

先日、桐乃の趣味を見た時どことなくインデックスが好きなアニメを思い出させたため桐乃に頼んで借りたのである。（インデックスには教育に悪いと思われるエロゲー以外の桐乃の趣味については話したのである）

インデックスの暇潰し兼桐乃が趣味について話せる相手増える…なんとも一石二鳥な話である

勿論、インデックスはおろか桐乃からも全く感謝されないのが現実ではあるのだが…

「不幸だ…」

あれから数日が経った。
だが当麻は未だにバイトが見つかってなかったのである
最後の1人の募集を他の人に盗られる事もあった

「とりあえず此処で頑張るかな…」

当麻がようやく見つけたのはゲームショップである。
たまたま募集していたと言うのもあるが桐乃の趣味について少しでも知っておこうと言う気持ちもあったのであろう

「じゃあ帰るとするか…」

バイト先も見つかり珍しく満足そうな顔で帰宅する当麻。

が

「なんだなんだ？」

当麻の目の前に地面にしゃがみながらあたふたしている少女がいた

状況から察するに掛けてた眼鏡が外れてしまい探しているらしい

実にベタである

「これですよね？」

見過ごすわけにも行かず、少女が探しているよりももう少し横に落ちてた眼鏡を当麻は広い少女に渡した

「あ、ありがとうございます…ってきょうちゃん？」

「ええっ！？」

眼鏡を掛けるなり当麻に顔近づけ知らない名前を出され当麻は困惑していた。

「あっ、よく見たら違った…ごめんなさい！」

少女は自分の間違いに気づくとすぐに当麻に深々と御辞儀をしたのだ

「いや〜、別に気にしなくていいですよ？てかなんで眼鏡を？」
「転んで、眼鏡が外れちゃって、あたふたあたふたって探してたんです…」
（効果音を口に出す人っていたのかよ…ってかなんか地味な人だよな…）

「ここが私の家です！」
「おお…」
少女の計らいで家まで案内された当麻
彼女の家はなんと駄菓子屋であったのだ
「なんか駄菓子取って来ますねっ！」
「別にいいですよ？」
当麻が言い終わる前に少女は店の奥に消えて言ってしまったのだ

「はぁ…」

1人残された当麻は駄菓子屋の外のベンチに腰をかけていた

ちなみに当麻が少女の姿にどことなくオルソラを思い出していたのは秘密である

「たむら屋、か…」

看板を見ながら独り言を呟く当麻

かなり年期のあると言った感じの店で江戸村に会っても違和感がない

そしてどことなく落ち着ける場所だな、と当麻は感じていた

そこに

「ただいまーって、あんちゃん？」

丸刈り頭の少年がこちらに駆け寄ってくる

「って人違いか…」近くで見ると違ったのか溜め息をこぼしていた

「さっきの眼鏡の人と言い、君と言い俺を誰と間違えてるんでせうか…」

二度も人違いに合い、くつろいでいた当麻も落胆していたのであった

「お菓子とお茶お持ちしました〜」

そこにお盆にお菓子とお茶を乗せながら少女が帰って来た

「あっ、どうもです」

素直に渡されたお茶を貰い、当麻はお茶を飲み始めた

「てかさ、姉ちゃん！この人あんちゃんそっくりだよな！」

「ロックもそう思ったんだ！やっぱきょうちゃんそっくりだよ〜」

「だからあんちゃんとかきょうちゃんって誰だよ！」自分の顔を見つめられながら話しているのが堪えられなくなったのか当麻は声を張り上げた

しかし当麻はここである人物を思い出した

「…まさか京介？」

「「知り合いだったの〜！？」」

当麻の予想は当たっていた

自分も初対面の時似ていると思ったのだから仕方ないのかも知れない

「やっぱ京介の知り合いなのか？」

「うん、知り合いって言うより幼なじみかな？」

「なぁなぁあんちゃんとどう言う関係？まさか従兄弟とか？」

二人の姉弟は当麻に迫って来た。どうやらしばらく返して貰いそうにないようだ

「不幸だ…」

当麻は誰にも聞こえないくらい小さな声で呟いた

「じゃあ、俺はこれで」

「また来てね、上条さん！」

数時間後、ようやく当麻は解放された

少女の名前は田村麻奈美、丸刈り少年は田村岩男と言うらしい（本人はロックと名乗っている）

「おう、じゃあな田村さん」

当麻は手を振りながら高坂家に帰宅するのであった。

「今日も大変な1日だったな…」

当麻は今日の出来事を振り返っていた

田村姉弟との出会い…かなり天然な姉弟であったが高坂兄妹とは違い、仲は良かった

そんな姉弟を思い出しつつ当麻はドアに手を掛けた

しかし

「ん？開かないぞ？」

なんどもドアノブを回しても開かない高坂家のドア

そこで当麻は鍵がかけられてると察した

「おお、当麻」

「おう。…ってそのダンボール何？」

そこに庭の方から京介が現れる
何故かダンボールを抱えている

「ああ、実は…」

京介が言うには今日は桐乃の友達がやってくる日だったらしい
インデックスも混ぜて遊んでいる時悲劇は起きた

桐乃のオタク知り合いから同人誌とか言う物のダンボールが送られたのだ
桐乃の友達には桐乃の趣味は知られてない
よって趣味を守るために桐乃からダンボールを強奪
しかしその際の取っ組み合いで京介は偶然桐乃を押し倒してしまった

よって桐乃の友達からは変態と認識され、桐乃はマジギレしてしまったため京介は家から閉め出されたのであった

「なんつーか、不幸だな」

その様な出来事によく遭う当麻はいつも以上に京介に同情していた

「あ〜ぁ…」

憂鬱な気分で京介が伸びた所で、

「おじゃましました〜」

どうやら桐乃の友達が帰る所らしい

「ようやく家に入れるな…」

「だな…」

元気の無い声を互いに出しながら二人は玄関の方に歩いて行く

すると

「あの〜」

「「はい？」」

二人は口を揃えて後ろを振り向いた

そこには桐乃の友達が立っていた

青髪のロングヘアーで桐乃に負けない位美人であった

「って、お兄さんってまだ兄弟いたんですか？」

「他人だぁぁぁ！」

またしても似たような事を聞かれた当麻はやや怒り気味に叫んでいた

「す、すいません…」

「で？何の用？」

叫んでいた当麻の隣で京介と少女が会話をし始めた

「あの箱の中身でお話が！」

「いや、悪いけどこれは…」

「いえ、詮索するつもりは無いんです！…ただそれって桐乃が見ちゃいけない物なんじゃないんですか？」

「「え？」」

京介も当麻も何故わかったのか、と心底驚いていた

「だって、さっきのお兄さん、桐乃に嫌がらせをしてるようには…もしかしてプレゼントとか？」

「そんなんじゃないさ」

自分の意見を一方的に言ってくる少女に京介は冷静に答えた

「そうなんですか？…でもきっとお兄さんの事、桐乃は本気で嫌ってなんかないですよ！」

「そりゃあねぇだろ…」

「え？そうなんですか？」

「…」

少女の考えを頑なに否定している間、当麻は何か違和感を覚えていた

自分でも言い表せない違和感…

しかし何かイライラに似た物を感じていた

一体これは…

「せっかくだからそちらのお兄さんもメアド交換しませんか？」

「うぉっ！？」

いきなり少女が声をかけて来たので当麻は正気に戻った

どうやら気づかない内に京介は少女とアドレスを交換したらしい

「別に構わないよ」
当麻は自分のポケットから携帯を取り出し、少女とアドレスを交換した。
「ありがとうございます！っでお名前は？」
「上条当麻。あんたは？」
「私は新垣あやせです！」

こうして今まで高坂家にしか知り合いがいなかった当麻に新たな知り合いが増えた
「不幸…じゃないよな」
当麻は一日を振り返り大きく深呼吸をしていた。
すると
「……」
ドアが開き、向こうから桐乃とインデックスがこちらを見ている
桐乃は無表情、インデックスは当麻に置いかれた怒りからかこちらを睨み付けている

「「不幸だ…」」

当麻も京介も同じ台詞をもらしながら玄関へと入っていったのであった。

とある友達の眼鏡娘（後書き）

更新遅れてすいませんm（＿＿）m

ようやくあやせ編に入る事が出来ました（汗）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0732q/

とある妹の人生相談？

2011年1月19日01時44分発行